クローズ・アップ

コミュニティーづくりを考える

最近、コミュニティーと言う言葉が良く聞かれますね。コミュニティーっていったい何でしょう。そして、今、整備されつつある地域生活センターを核に、このコミュニティーづくりをどう進めていくべきかを考えてみることにしましょう。

根岸地域生活センターが完成し、「みんなの施設である以上、敷地内の造園は私たちの手で…」と、11部落の部落長を中心に、松やカシ、サツキなど約70本を植樹。その名も『連帯の庭』と名付けました。「庭の管理はわしら老人たちが引き受けますぞ」と、根岸地区の６つの老人クラブが輪番で、草取りなどにあたっています

豊かさの中の貧困

戦後三十数年。世の中の変化は驚くばかりです。急激な経済成長は、私たちに便利で豊かな生活をもたらす原動力となりましたが、同時にさまざまな社会問題を全国各地に投げかけました。

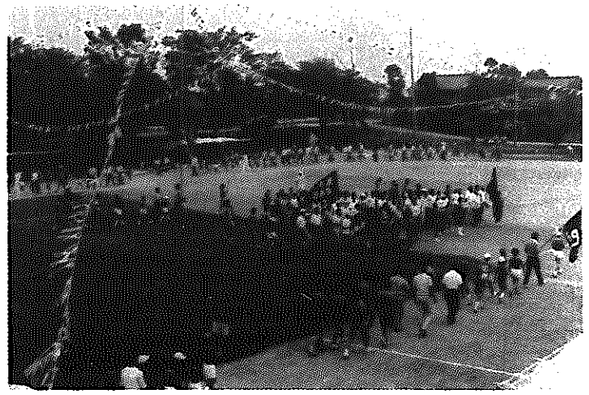
都市部へは、人口や都市機能が急激に集中し、土地利用の混乱、都市施設の立ち遅れなどの問題が生じました。また、農村部では、若年層を中心とする人口流出で、防災、教育、保健など、地域社会の基礎的条件の維持さえ困難になってしまう地域さえ出てきました。

こうした都市化の波は、都市に限らず農村部でも、地域社会のまとまりに変化を与え、生活環境にも変化をもたらしました。このため、人々は過去の地域的な束縛から解放され、近隣の人たちとの親睦や相互扶助などから自然と遠のくようになってきました。

生活意識の多様化

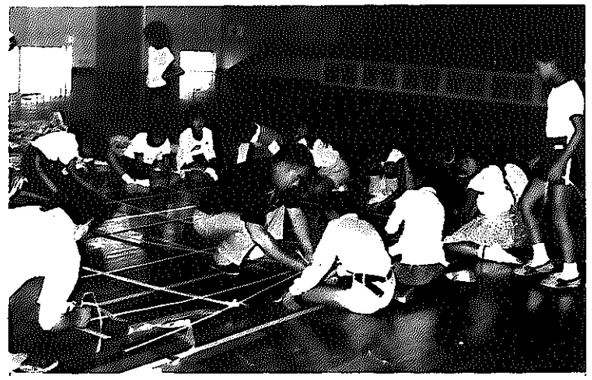
特にこれら合理性、個人中心性、匿名性などを特徴とする都市的生活意識や生活様式は、若年層を中心に広がり、『他人にかかわりをもたず、かつ近隣にわずらわされない個人中心的な生活パターン』を作り出しました。

このような変化は、次第に地域社会に対する関心や依存度を減少させました。



地区運動会はどの地区でも年に一度の楽しいコミュニケーションの場。中でも盛大な庄瀬地区運動会は、公民館を核とした運営協力体制が確立しています

大凧作りの技術を子供たちから学んでもらおうと、凧合戦協会員が各学校を巡回し、指導にあたっています。大凧の４分の１の大きさの凧を作って楽しむ子供たち



明るい家庭づくり推進運動の盛んな小林地区。中でも人気の高いのは、地区親善卓球大会。狭い体育館いっぱいに、400人もの家族でにぎわう。今年度で第６回目を数えるこの大会は地区の一大イベントだ

増大する行政の役割

また、人々の生活意識の多様化に伴い、行政機関による専門処理の領域が拡大してきました。このため、本来、地域社会で解決できるような問題についても行政に依存するという傾向が増大しました。

このような傾向は、市民が相互扶助的に解決すべき問題領域と、専門の行政サービスが行うべき問題領域との境を不明確にし、その間の役割分担、協力関係を希薄にしてきたといえましょう。

コミュニティー問題が取り上げられるようになった背景は、こんなところにあると言えましょう。

コミュニティーとは

最近、コミュニティーという言葉が良く聞かれるようになりました。しかし、その割にはコミュニティーの本当の意味が理解されていないようです。

「カタカナを使わずに日本語を使えばわかりやすいのに」と言う意見も聞かれます。和訳では『地域社会』『近隣社会』『生活共同体』などとなり、どれもコミュニティーのもつ意味を十分に言い表わしてはいないようです。なぜなら、コミュニティーとは今までになかった新しい要素をもつ地域社会のことであり、その点を無視して簡単に地域社会と言い切ってしまうと、誤解を招きやすいからです。

コミュニティーとは、**住み良い地域社会をつくるために、他人まかせでなく、自ら行動して問題を解決していく連帯感ある人々の集まり**ということになります。

そこで、コミュニティーには、大きく分けると二つの目的があり、『人間的なふれあいの促進』の面では隣組とか町内会といった比較的狭い範域が適当だと言えますし、『地域課題の解決』という面からは小学校区といったある程度広い範域が望ましいと言えます。

白根市の場合、その小学校区にコミュニティー施設として、地域生活センターを配置し、毎年一館ずつ整備してきました。

駐在室からセンターへ

昭和三十年、一町八か村が合併して以来、駐在室を八地区に置いて一人ずつ職員を配置し、窓口業務の取り継ぎを行ってきました。

昭和五十三年四月、機構改革を行い、地域生活センターと改称、